



Profile—黒田敏数

ウェストバージニア大学心理学行動分析学科博士課程修了。Ph.D. (Psychology)。専門は行動分析学。論文は「Resistance to change and resurgence in humans engaging in a computer task」(Behavioural Processes, 125) など。

私は15歳でアメリカへ留学しました。高校からの留学でしたので、当初の目的は心理学を学ぶことではありませんでした。しかし偶然そこで心理学と出会い、それを大学・大学院で専攻しました。ここでは「はじめの一步」に焦点を合わせ、大学での経験をお話しさせていただこうと思います。

私が在籍していた2年制・4年制大学には心理学専攻の日本人は私一人でした。2年制大学への入学当初は知り合いがおらず、英語もうまく話せていたわけではありませんでしたので、最初の心理学のクラスは正直大変でした。成績も悪く、なんとか単位が取れた程度でした。しかし、貫き通したことが一つあります。それは講義室の最前列の席のど真ん中に座ることです。室内で唯一のアジア人ということもあり、先生も気にかけてくれるようになりました。2年次になると同じ専攻の友人も増え、勉強会に誘われるようになりました。実はこれはとてもラッキーなことで、高校では同じ境遇

自分を信じてやってみる

愛知文教大学人文学部人文学科 専任講師

黒田敏数 (くろだ としかず)

にある留学生たちと一緒に勉強することはあっても、アメリカ人と一緒に授業外で勉強するなんてことは一度もありませんでした。

その後4年制大学へと編入したのですが、授業料が安いという理由で3年次はサテライトの授業を履修しました。アメリカは土地が広いことからキャンパス外にサテライト施設が多数あり、メインキャンパスからの衛星放送を通じて講義を受講できます。一部のサテライトは刑務所内にあり、囚人の学生と話すことができたのです。これは「犯罪に手を染めるのは、学歴がなく職に就けないからだ」という考えに基づいているシステムだそうです。特に犯罪心理学や異常心理学のクラスでは、彼らから大変興味深い話を直接聞くことができました。

4年次からはメインキャンパスで講義を受けるようになりましたが、そこで転機が訪れます。必修科目は全て履修し終えていたことから、興味のある科目を多数履修していました。1年次生向けの「行動分析学」もその一つでした。聴講という形でしたが、「心理学に『こころ』という概念は必要ない」と主張する先生にとっても興味が湧きました。これは心理学において非常に難しい問題ですので詳細は割愛させていただきますが、『こころ』という概念の妥当性にかかわらず、それを仮定せずに行動をどこまで説明できるかの検討は必要だろうと考えるようになりました。

行動主義の考え方に共感しつつ

も、大学院では臨床心理学を学ぶことを考えていました。それが心理学を専攻した元々の理由だったからです。しかし、応募した五つの大学院から面接に呼ばれることはありませんでした。臨床心理学を学ぶために大学生としてできることは全てやったつもりでしたので、非常にショックでした。でも本当の勝負はそこからでした。行動分析学を教えてくれた先生に悔しさを打ち明けると、「お前は臨床心理学者には向いていない。行動分析学をもっと学ぶべきだ。まだ間に合うかもしれない。行動分析学を学べる大学院に応募してみろ」と言われました。また、「50年前、俺がまだ学生だった頃、興味があった研究者を直接訪問して、傲慢な態度で『Here I am and you are lucky』と言って、そのまま大学院に入った」という話を聞かせてもらいました。その言葉に勇気づけられ再び応募してみたところ、面接に呼ばれ、あれよあれよという間に大学院に入ることができたのです。

ジークムント・フロイトやステイーヴ・ジョブズの言葉にもあるように、過去を振り返れば様々な出来事が互いにつながっているように見えても、将来何が起るかとは分かりません。だから自分を信じて道を切り開いていくしかないのだと、アメリカ留学で学びました。